

## 電源を切ってください (安全な使い方)

「マリコ、母さんはペースメーカーを入れることになる。」

病院に向かう車の中で、父は運転しながら話した。母が倒れて入院してからもう2週間。母の心臓が悪いことを知っていたが、手術すると聞いたのは初めてだった。

「お母さんは元気になるの？」

私は不安になって、父に聞いた。

「大丈夫だよ、マリコ。母さんはきっと元気になる。」

父との2人暮らしにも少しずつ慣れてきた気がするが、やはり、母がいないときみしい。父は以前よりも早く仕事を終わらせて帰宅するようになったけれども、夕飯を一人で食べたことも何度かある。朝、眠い目をこすりながら朝食を作っているときには、母のありがたみをしみじみ感じる。

「ペースメーカーを入れても普通の生活はできる。軽い運動ならばできるそうさ。ペースメーカーが正しく動いているかどうかの定期的な点検と、8年後には電池交換のために手術をしなければならない。それと・・・、」

《ピピピー、ピピピー》

話の途中で、父の携帯電話が鳴った。父は車を道路の左側に寄せて止めた。営業の仕事をしている父は家庭用と仕事用の2台の携帯電話を持っている。胸ポケットから取り出したのは仕事用の携帯電話だ。

「わかった。その話は月曜日に・・・じゃあ、よろしく頼む。」

電話を切ってから、父は私との話を続けた。

「それから、携帯電話はペースメーカーから22cm以上離さなければならないんだ。父さんのように、胸ポケットに電話を入れていては危険だな。そうさ、病院内は携帯電話の電源OFFだったな。」

(※ <http://www.nttdocomo.co.jp/info/manner/>)

そう言うと、もう一台の携帯電話もズボンのポケットから取りだして電源を切った。

お母さんは元気そうだった。

「マリコ、朝ご飯きちんと食べている？遅刻しないで学校に行っているの？」

「大丈夫だよ、お母さん。」

確かに、遅刻はしていない。でも、始業チャイムぎりぎり学校に着いたことが2度ある。私はお母さんを心配させないように話をした。

「マリコの面談までには退院できると思うから。マリコ、お母さんがいなくても勉強きちんとしなさいよ。成績が悪いと、お母さんびっくりして心臓が止まるかも。」

「怖いこと言わないで、お母さん。」

笑いながら、私たちは久しぶりの会話を続けた。

「担当の先生から、母さんの手術についての説明を聞いてくるから、待合室で待っていなさい。」

父はそう私に話すと、診察室の方へ向かった。

これからある母の手術、まだ母は家には帰って来ない。それを思うと心がだんだん暗く重くなってきた。私はボーとして待合室にいる人たちを眺めていた。マスクして背中を丸めて具合悪そうにしている人、腕にギブスをしている人、松葉杖をつきながら歩いている人。

「皆さん早く良くなってくださいね。お母さんも元気になってね。」

私は心の中で願っていた。

「俺じゃないって、それ。」

その声には私は振り返った。制服姿の男子高校生が待合室のソファの端に足を投げ出し、少し興奮して携帯電話で話をしていた。一番後ろのソファでは小さな子どもを抱きながらメールを打っている若い母親がいる。

退院しても、お母さんは検査のためにこの病院に来る。この待合室でお母さんの隣の人が携帯電話を使っていたら……。そう考えると私は不安になってきた。

待合室の壁に何度もテープで貼り直し、やぶれかかった張り紙が私の目に止まった。

病院内では携帯電話の電源をお切りください。

何度か読み直して、私は決心をした。

私は電話をしている高校生の前に立って声をかけた。

「あのう。」

私を見上げた高校生がちょといやな顔をした。

私は勇気を振り絞って大きな声で話した。

「病院では、携帯電話の電源を切ってください！」

待合室内の空気が一瞬、凍りついたように感じた。

「またあとでな。」

高校生は電話の相手に一言話して電源を切ると、突然立ち上がった、私はびっくりして、一歩後ろに下がった。高校生は何も言わずに、私の前を横切って待合室を出て行ってしまった。

私たち2人のやりとりを見ていた待合室内の何人かは、あわててポケットから携帯電話を取り出して操作していた。メールを打っていた若い母親はばつが悪そうな顔をして携帯電話をハンドバッグに入れていた。その様子を見ながら、私の足はまだ震えていた。

「ありがとう。注意してくれたのね。」

その声に振り返ると、母と同年代くらいのナースがいた。

「私たちも言っているんだけど、患者さんやお見まいに来る人たちが守ってくれないから困っていたの。あなたのような人がいると、勇気づけられるわ。」

その言葉に今までがまんしていた母への思いや不安がおさえきれなくなり、涙になってあふれ出てきた。

父が待合室に来た頃には、涙もすっかり乾いていた。

「マリコ、帰るぞ。」

私の顔を見て、父はちょっととまどったように見えた。泣いていたことに気がついたのかもしれない。でも、父は何も言わなかった。

「娘さんですか？」

さっき私に声をかけたてくれたナースが父に話しかけた。

「高校生の男の子に『携帯電話の電源を切ってください！』って大きな声で注意してくれました。勇気があってえらいですね。困っていた患者さんたちがとても喜んでいました。」

「そうなんですか。」

父は笑いながら私を見ていた。私は少し恥ずかしく、うれしく感じた。

次の週、手術の立ち会いのために、私と父は病院に行った。

手術室へ向かうため待合室を歩いているとき、ふと壁を見ると新しい張り紙に変わっているのに気がついた。

携帯電話の電波により医療機器が誤作動を起こすおそれがあります。

この病院内では携帯電話の電源を必ずお切りください。

病院スタッフ一同

私は不安が小さくなっていくように感じた。